

Title	阿部隆一氏蔵髭剃毛
Sub Title	Transcript of the Higesorige manuscript in the possession of Abe Ryuichi
Author	大沼, 晴暉(Onuma, Haruki)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1999
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.34 (1999.) ,p.443- 458
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000034-0443

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

*注記・論文中の写真について転載する場合は斯道文庫にお問い合わせ下さい。
資料紹介

阿部隆一
氏蔵 髭剃毛

大沼晴暉

凡例

奥羽二本松滞留滑稽之記
髭剃毛 二編

溜池泥龜箸

一、本書は故阿部隆一氏蔵「髭剃毛」を翻印したものである。
一、翻字はなるべく原本のおもかげをとどめることに努めたが、印刷上制約があり原本そのままの形はとっていない。

髭剃毛二編 奥羽二本松滞留

溜池泥龜箸

1、漢字は新旧別体を生かし、類似の字体で翻印した。
2、仮名は通行体を用いた。合字は二字に分けて翻印した。
3、字詰・字配りや字の大きさは、印刷上の制約のため必ずしも原本どおりとはなっていない。二行割りの部分も同様に、原本の改行様式とは異つてお断りしておく。

治れる御代の恵の有難や参勤交代の御大名の御登り御下り御飛脚の走奔ほんそう或は商人の賣荷入相の鐘の音にせき立宰領の馬士呵る聲やかましく一羣の旅人と共に彼周滑平曇八も漸二本松竹田町菅浪善八といふ旅屋に着ぬ此城下至りて賑わしく此頃遊女屋敷多出来繁花は病人斗り泊るはこた屋なり 周ハイこめんなさへましわしは取上の者てこさり升此所病用ニ参りましたとふそ御宿お頼申升宿主ハ

イよふ御出サア、先こちらいト案内につれて座敷へ通り先一ふく吞ながら
二本松甲斐のなくてや捨小舟

つなくとこなき菅浪のはた

阿部の仲広公によそひて一句浮んた

志さす唐と二本の松かひか

ありてやけふそこ、に月見る

斯興し飯早夕飯も仕舞其夜は旅疲れにや何シのしやれもなく寐

ぬ斯而或人は暫くこ、に病用の積りなれば老間をかりきり薬り更 周疊けふは

よつほと暖てこさり升醫、左様さ日増天氣はよしそして日も余

程長ふなりましたト咄しける内會津邊のもの木挽らしき男赤ら顔に髭たらけ

よつてねつきはつし殊の外のとかわの大男大木から落て腹引ちかひ其うへ五臓をいたためたるに

くよしにていかにもせつなき聲にて、私は會津の萬代山の麓の者てこ

さりまふすかこのぢ、木から落まふした所かといふ事か腹の

中かいたんでずないのんとかかわきまふすはいひ、こつちい

来なさいといひつ、脈をとり舌をだしなさいといわれて彼男舌といふ事は

て、會、こめんなさりませ醫、イヤくるしうないだしなさい

トせきたてられよんとこ、會、ハイそんならこちらひ向てくたざりまふせ

るなき躰にて顔赤らめて、トいひつ、障子越に片寄りくつと前をあけ一物をいたしければ有あふ人

レ此へろの事さ、會、ハイそんなら此へろの事てこざりまふすか

ト夫より腹杯撫さすり彼男は調合場にひきさかると、女、ハイ此間御影様て

又此町の者なるや勝山に髪ひたる女前掛はつして、けふ平愈ました多キにあり難ふこざりへしたたりし也、時に御薬

り何ほやりましたな女、ハイ廿七ふく下さました、そふか五分

拂にして壹分都合もあわんさかへもう三服吞なさい、ハイ今御

薬りやめてもよひとおつしやりまして又吞のてこさんすかへ、

ソリヤ吞すともよふこんすか壹分の都合にあわんさかへ、ソリヤ

ラなけてもよひのかひ醫、とふとも勝手にしなさいこちじやア

壹分にさいなれアよひわいトいわれて此女も調合場にさかると又廿五六

つと出て、男、ハイ先生久敷御目に懸りましたか御達者て宜

ふこざり升時に昨日手めへの女房をさし上升て委細申上升たか

イヤハヤ困升病氣てこざり升、アリアアあん腹のふくれるといふ事ア

とふも濟まくないこんでこざり升其事に付て今参り升たかアノ

ほうひのたまつたのとおつしやり升たそふてこざり升か一向

訳りましな事てこざり升から御聞に態々来やしたト演る一躰い

わからぬ言葉つかふものにてほうひといふ事、ア、ソリヤへのごんた、

はへの事也殊更此いしや早言葉かくせにて、めし故それ社病氣になりたるやと獨かてんしこそ、と歸りける又つれの

婆様と見へてせ、アイ此ち、アよへもんでこざりやすわしも二三年

前からこないに痰かせる、し升か此頃ア痰か出る程に、多

キに困り升から来ましたとふか頼升、ソリヤ困つたもんだ年寄の

痰は格別せつないもんじやト脈を、ト膝すり寄せける中もありあふたはこほ

から、此様に出まして困り升、ム、コリヤ口から斗じや大躰のこつ

てなひから鼻からも吐きなさい口と鼻とは穴か一所たからア、

コレ婆さん落の臺杯かよひもんじやから沢山喰さいそして鼻も
かまつしやひ婆ハハイわしやア此通りすつはり齒かないから喰ふ

事アなりやせん醫ソリヤマア能煎さいすりやさつとかんてよふ

こんすアイ有難ふこさり升ト是も調合場に引下り待て居る扱先刻よりの病人幾人といふ数多くつかひ居たる人にあく

ひするもあり伸るもあり皆たひくつの躰なり彼婆様も頻に鼻をかむ此婆ア思ひ
けるは落の臺を喰たり鼻を喰たりする事と心得痰の薬りに鼻をかんで喰ふのも定而

返し薬りにやとかんたるコレヤ多にかみよひ一向に骨も折す齒もい

たますそんなら落の臺も能煎たらこんな物であるふトよろはしけなる顔を見て

そはに居たる人ハ肝をつふしとつとオ子コレヤ婆さん何をするアイ

返して笑ふを聞てオ子達走り来たり先生様ア落の臺を喰たり鼻をかんだりすりやよひといひなさい

升たから其通りするのさコレヤとんた事をいふも下輩の者も一とに

又ミ笑ければ又八取あひす

鼻かむと鼻を喰イとの透ひにて

口て上下笑ひをそする

此笑い鼻といふ字に能似たり

しかし婆アてくさくこそあれ

斯讀興し旅屋へ歸り夕飯も仕舞ぬ然るに此頃盗人茂くあちらの壁を破ら

さわかしく家ミ毎に夜に入れば柏子木を打てたかひに會圖を知らしめ大家は寐間

毎に柏子木を打て夜廻の番人に油断させしとする故暮六ツより町内やかましく

蕎麦アトふり賣か聲も兎角に聞いされは自ら高聲接ア針のヲ療じ

コレ御亭主毎晩のあちらこちらの柏子木にやあきれるな

んと毎晩の事て嘸草卧たてあるふ今夜ハ些わしか打てやらふ亭
主左様か子イそんならとふそお頼申升ふト柏子木を渡され茶など吞け

モウ四ツたそふじや寐ましようト枕元に柏子木を置夜着引かふり前後も

しモウ八ツでもあるふかと夜着の中から手を出し枕元の柏子木をとりチヤン

ヤチヤント打けるに勝手の方にて高聲して笑ふはてそれでは又寐ぬるやと耳済し聞

ければ膳わんのもてあつかふ音又著すへる音なれば扱は夜か明たかと顔そつと出し

見れば雨戸のすきより朝日のさす影ありと見ゆれば今更おかしく又夜着引かふ

りたる所に亭モシ御客さん何のこつたモウ五ツたまた眼か覚

ねいかコレ御客さんといふもいましく高軒してグウトそら

る中五ツ大鼓トシコレ御客さんアレモウ五ツたそして飯

も冷升からコレサ御客さんトむりに起され漸目覚たる風をしてナニ夜か明たかへ

ナニ明た所じやないモウ五ツか今鳴たわいソヲカトいふ内宿の女

来たり今朝柏子木打たる事子供コレおつかちやんア伯父さんか夜か

のおかしさ思わす来たる也

明てから柏子木を打たノウウおつかちやんト子供に追笑はる、こうはらさ

見れ周コレ曇公コイツ寐ていやかるべらぼうめ曇公モウ五ツた

べらぼうに寐くさるせいひは曇八よきから首をいたして曇へらほ

うはそつちの事た今朝の柏子木か何の為じやモウいふてくれ

なトいふ内街道の賑ひ大方ならず座敷の人見世先へ走り行彼式人の者も何や

ならんと夜着た、み捨にして走り来たり集り居たる人の中をおしわけ人の先に

躍り七人柏子とりつ願人ハ御枡様富士のナア、白ア雪ア朝

ア日てイ解いるウ白ア齒ア娘イはさんさ寐ていとけるヤアトコノイヤ

レハイササ、ヤ、御枡様トをとりうかれて目やにの顔を伸なかうコ

を見て、あれかアノ今朝柏子木を打たのはあの色の黒ひ鼻の平た
い男かハ、成程まぬけらしいつらツつきわへト名ノ周滑平カ顔
を見るゆい
外聞わるく穴にてもはいりたき心持にてふさき居たるかとふもこ、に居た、まれす
小腹も立とも又恥の上ぬりと了簡してこそ、と単のよふに成り座敷へ逃て行ける
か飯喰に勝手へ行
かれもせずして

盗人を除かん為の柏子木か

柏子の抜けて飯も喰れず

跡は大笑となりぬ武人は余りに面目なくかくてもはてし
なければたはけて出んと勝手へ来たりイヤモウけふは

おつな趣向をして皆の衆に笑ひを催させたト黒めんとしても亭主に起
されたる事あれはひとり

てはつかしかる顔を、イヤサ小座敷の客さんの趣向にや恐れるサア、
見て亭主すかさず

飯をあけやれトいわれて漸心落つき臆に向ひ居たる所に何やら又海道賑しく三
味線大鼓三而御神樂の音の様なれば座敷ノ又見世へ走り

行 亭主、小座敷の客さん又出て見なさんねいか周、モウイヤタ

くトいふ内向ふの上様
走り来たりコレ此家のかつさんも見なせい珍らしい踊た

ぜいアノ五升踊とやらいふそいトこの女房
もつれて行女房、御客さんとふ

だい周、わしらアそれよりか飯を喰なから聞やしよふトとりあ

いす

見升より聞升ほふかまし升よ

酒も吞升飯も喰升

(挿絵三図)

打興しつ、手盛りに飯も喰仕舞斯而五升踊りも過ぎて皆々宿へ歸り茶吞
ながら今の五升踊の妙なる事を咄しかけ

る、イヤモウとんだ面白かつた、ソウサありや今夏江戸の芝翫か扱
いたのしやそふた、そふてあるふ余程奇妙に面白ひ處かあると
彼武人か見ざるゆへむしようにはむれは今更見ざる事のくやくしくなりたる折から筋
向ふの薬種やの見世の先にてやかましかりければ何やらんと出て見るに彼薬種屋の
番頭と一軒隣の亭主 番頭、コレ此親父どふする所存て目をつぶしア
と大聲上での喧嘩也

かつた親父、ナニためこくな我ばり身代かよくなりたいて近所

のびん乏を欽こんで居やアがる番頭、ばかアしやへるなコレにし

に金たさせて扱こしらたじやあるめへしおいらア金てこしらいておい

らア屋根にあげておくのにふてい奴ワだめこくなトりきんで彼親
父につかみか

、ると今老人の男やう、歩行出し是も彼番頭に如何なるいしゆありやつかみか、
番頭は相手武人になるそふすると彼薬種屋からは是を見て手代共武三人乗り刻む庵

丁杯携ひて走り来たりけるに武人の女房是を見てとんで出とりさいてもとまらず内
の子供はなき出すゆへ疊八見かねて見世からはたしになり走り出やう、三人を引

け 疊、マア、何のこつたかしらねいかしつかにしなさいとふ

したのたい番頭、イヤ此親父かわしとこのかんばんの鬼瓦の目を

皆た、ぎつぶしやかつたから、ナニコレよふ聞てくんなせいわし

かとこア向ひの家たんがみなさいアレコノ屋根の鬼瓦か年中わし

所を雨か降りても火かふりても風か吹ても夜るも昼るもにらめ

とふしにするもんだから見なさいわしか家は是此通りににらめ

つぶされに潰されて一年こしにつまらねいからとふそあの鬼瓦

を取てくれいトわし斗か組合の衆込頼んで願ひ升たけれと聞ま

せんさかいそれで思ひにや世間にも鬼のめんだまふつつぶせと

いふ事があるからよんへアノ鬼瓦の眼玉をかね搥て打つふしたのさトいふと番頭又口とからか尤組合迄頼んでよこしたもんだからそこで名さい仕替りやよいもんだとして一躰此親父庄吉といふ名だから世間にも万吉といふ奴ッを万きといひ権吉といふ名を権キといふからそこでちの字をのけて庄きといひなさいそふするとよひからといひましたそれを聞入れすこんな事しやアかつたト多にりきめは又向ふの親父それたとつてあんなにやぶれて寐なから月見するよふな家の庄きは鬼にへこまされよわく成りて居らア風流でもするなら又しもの事只酒斗リ好きなものたし弥つまらぬいから眼をふつつぶしたのさトいひも果ぬに今老人の助太刀モシわしかいふのもよふきいてくれなさい向ふの山崎屋彼業種屋名なり杯アあんなりた一躰わしも元ア股野孫内と申升したしたら山寄屋のいふには孫内といふ名は孫かなくなるといふ事だから是から股野金内と改めなさいそして金内とは金か内に沢山有といふ訳になるからといやアかるからそこで金内と改た事さソウすると孫かふへる程に〳〵老年に春秋と忒人ツ、生れた夫も又みんな女の子て生きていやかる夫から段々わしか病氣が起つて両方の金玉かうへにあかつて誠にふ自由じやによつてあちらこちらの薬りも吞て見たか一向によひ事かないそしたら山崎屋かわしか所二名

方のよひ薬りかあるから吞て見るとよこしたもんだから吞て見たれはよつほとよひから夫から段々吞た所ア極月の書出にア十式ノ八分也せんきの薬代といひやかかる孫共の仕着せの物に困り果むすこ夫婦奉公へ出した事さそこで孫共アわしかそたて、其上イ病氣ナもんじやから段々勘ひて見たリヤ孫内といふ名をやめた年からきん玉のきんかつり上ッてしまふた金内といふてからこんな病氣に成りヤした左すれは名を仕替た故じや何ても山崎屋杯ア我ばしよけ能レアゑひ男あんまりごうはらたから何かなと思ふ所へ隣の親父か喧嘩是能イ幸ひとそこでわしも助太刀したのじやわいト三人の言葉何れも理あり是〳〵そんならコ、アマアわしにくれなさい三人〳〵ソリヤ理屈さい付はよふこさる是〳〵そこでこふた先山崎屋さんは鬼瓦の眼かなけれア猶ゑいじやないか番頭〳〵リヤお前さんあんまり片鼻肩といふもんだ是〳〵イヤサそふじやないよふ聞なさいお前の所へ買物に来た人か邪よ睨まれたら買手の薄クなるじやないかマア能考ひて見なさい番頭〳〵ム、成程そうたそんなら堪忍してやりましよふト業種屋は人の名ても仕替てくれる程あつてとふても物が訳りければ早速合点しける夫より是〳〵コレ庄きさんとやら霍乱くさい名しや日本一の風の薬リ達広さんと兄才かへ時にお前も此度から仕合かよひそしてわしか又名を仕替てやるふ今迄あんまりちいさい庄きじ

膝まき居たるかとうやら下タかかたそふなれは七戸表を引たくり見れば先きにいふ
彼平石なりかくの如く大勢の見物なれとも此所は平石敷れたる場なれは皆こゝに

居らざるなり斯て前方の女中杯も彼老杖の平石の上なり併此所は正面にて見あんは
いのよき場所なる故彼女中方もこらい花毛種を敷てもいたみけるにや手んく手に手
拭を膝の下くにすくやらしてこらいて居たるなり又彼式人の居る所は少し小高みに
て是又見あんはいのよき場所なれは堪いて爰に落付ぬ最早速幕斗りも過たるにや商
人の聲くやかましくやく□りに貴人の前でも人の膝の上でもかまわず別て此若き
女中の前を慰かてらにや尚商人のあるく事茂ければ下部の男色と小言いふても
聞入御茶あがりませんか火繩よふこさり升アか番附アよ

ふこさり升アか餛飩よふこさり升アかト向ふ斗り見て大男なりける
おもいれあかると下タは石な 曇アイタくく此べらほうめおれを
り膝頭コツキリといふいと 曇アイタくく此べらほうめおれを
は膝行にしやアかろのがトいふと周滑平コレ此野良ヲめおらア相手
をかたわにしやアかつてとふする積たトいはれてまんちうイヤわし
商人も十方ニくれ

かまさかかたわにする氣かなかつたけれど時のあいまちといふ
もんだからとふそ堪忍してくたさりませト大男なれともちいさくなり
いまわしこちらい引はり杯する内彼前に居たる女中方も先刻より 女中コレ餛
の商人の不行作に悪く思ひける事なれは女中皆口をそろいて

頭屋さん御前方アあんまり不行作さなもんだからそんな事も出
たのたノシ後ろの御客さん トいふと曇八今迄にらめ居 曇左様さ先
たりし顔にこゝとして

刻からあんまりた人の前を行時ア御免なさいといふて能下タを
見て行はよいのにとこたといふ事もなくあるきやかかるべらほう
野良 ト大聲上てりきめはそこら中の人と皆曇八か方を見て皆彼商人の不行
作なるをひしめく聲聞へければ尚みやつきとなり聞濟さる跡を見て

んちうやコレサ御客さんなんぼうにもはしかそそふたからとふ
そ堪忍して下さりませ ト又こちいさな聲して以の外からたに似合ぬへこ
たれ者なり前に居たる女中の供の男ふりむいて

コレまん頭やとんそんならおれか中に入るから聞訳さつせい時
におまへ其餛飩をみんな此所へ出して是て堪忍してもらわつせ

トいわれてせん方なく十方ニ暮たる顔して居た 水賣ヤア茂兵衛とん此衆
る所へ水賣来り先刻よりの一部始終を聞て
のいふ通りにして仕舞なさいお前の旦那にわかよひよふに咄
すからといふと此男と まんそんなら太五助さん何分頼升トま
ちう箱を彼男の前につき出しけれ 男コレサ後ろの御客さんマアわしか
は彼女中の供の男曇八にむかひて

いふ事を聞濟て下せい併わしかこんな事好ていふのしやないか
あんまり此人も氣の毒かるから トいはれて膝頭撫さすり見れば最早速
袖ふりも他生の縁とやらまして今日は一日こなひに袖を合せ
て居るさかいお前にまかせましよう トいふとまんちう凡百斗あるを小風
ぬ 男イヤモウあいつらアあんまり不行作たしお膝はとふ
たい曇モハヤすつはりよふこさるか時に此餛飩をお前の女中方
へくたさい トけいはくらしく但先刻の助言葉も 男イヤはアマアよしに
しなさいソウいはすとも畢竟ア御前の御影じや ト百斗の内十式三と
らみ 女中コレハ思ひかけない事てこさんす曇イヤ御辞退なし
出す

にトむりにおしつけければ 女中ハイそんならおもらいませう時に
御膝のいたみはとふてこさり升なモハヤよふこさり升トあいさつ
木 チャンくく トいふと幕も引時平の車に梅王丸桜丸と松王丸兄才の舎人
喧嘩の場なり良久しくして此幕もすきけるに最早速八ッ

半にはまたならん去程に式人は腹もへり殊更先刻よりりきみ 見物の人々早く
ける故にや以の外酒のみ飯もみんな一ナ時に喰ふ仕舞ト

にも御頼申升トひらになりてわひを頼めは先刻のまト 曇トそんならおれ

にまかせさつせいコレサ長吉さん此男こんなコレ猫の様にナニ

猫とこぢや子猫にねらわれた単の様になつてコレ是此通り火縄

出して願ふからモウ了簡してやりなさいトさも中の礼返しらしくいひけ

は火縄實は手持なけにコリトと逸て行彼トコレサ長吉後口の御客さんの

取持にて其火縄も取たのじやか喰ふものならこつちい置たかよ

ひけれと給物でないから饅頭囉ふた礼返しにそれやりなさい

といひつト前を向芝居見トアイ御客さんはアママ御前の御影ゆへ是程の

火縄もとつたといふもんじやからは御前に進せましようトイ

ヤコレアいた、き山の郭公といひたいかもろふてもとふもしよう

か子イから又取返しに返しやしよトたかひにやりつ返しつする横トモ

シお前ア方いらぬ物ならわしに下タンせわし所の居風呂の釜

かもあるさかへ此中から火縄ほしくて居ましたアイコレア御いた、

升ト横になくられ相方ト御茶あがりまアせんト商人の聲トやかましく皆ト

は先刻皆喰ふて仕舞し事なれば彼前方の女中の弁ト弁當杯ひらき喰ふて居る彼ト

當喰居たるを見て居る躰を見て前方の年間の女中トモシ御前さん方ア鹿末に

さり飯たか壱分進せましようト甘そふに喰けるおかしさ斯て彼にきり飯を

の付たる事を知りたれ、喰れもト曇トコウ平さんおまいごうきに我慢か

強ひぜ成程コレア味淋の味と煎染のしたじとよひ味たトについしよう

周滑平獨ておかしくなりけれとくつと堪ひ曇トに讀ける中

八に後方咄して驚かせんとひとりておかしく

味淋なる事をしたじと顔にしめト

あいさつか出す小便そ出しト

ト打興し居る中此幕も打過皆ことやトと木戸口の出入大方ならず漸に出

てさつきの趣向を曇八に咄せは今更くやく口そ、きなどして行なから

公けふの芝居ア兄才喧嘩じやノウウ天神様達ても兄才喧嘩ア面白

物と見える曇トアリア兄才じやあるめい周ト何兄才よ時平は兄さ

天神様ア才さそこて時平の大臣菅丞相といふたじやないかそし

てありや晩方の喧嘩たるし曇トとうして周ト足元の明るい中早

く返れといふけとふても公家の喧嘩は格別なもんだト

暮方の喧嘩と見たる奴ツらなれば

盆と暮とにやいつも喧嘩よ

斯而式人は宿へ歸りけふ女中共か小便飯を喰ひし事共咄し皆ト

大笑となるか、る所に見世先よりトアイ取上から御手紙ア届き

ましたトなけて行とりあけ見れト周トなんといつて来たトひらき見れば

一筆被参啓上候追々暖風相増候之処先以御相應之由珍重之

至りニ奉存候次ニ當方無ト天乍憚貴慮易思召可被下候然者先

便ニ路銀ニ差逼り候段被申越承知仕候則其御地ニ而土かトはば

四郎三郎方へ御操合可被成候尚其訳先方へ相達置候間夫積

ニ而間ニ為合可被成候余は得次便万ト可申上候以上

三月七日

富田茶釜

周滑平様

曇八様

周\ヤアコリヤ曇公とんた事をいつて来た此所の拂斗も凡式両斗
じや夫に十一匁四分三厂と間ニ合せるとは十方も子イ事た夫か
よひか又下り道中金も其十一匁四分三厂で間ニ合せるとさつま
らねいト式人うろたへひつくりし
て居る所へ亭まきたりて亭宿\ナンタ御前方ア大そうにひつ
くりした顔た子イ 周\コレサ善八さんをつな手紙か来た貴様の
所の拂ひも下りの道中もたつた十一匁四分三厂でまけてくれろ
と書てよこしたそして其十一匁四分三厂のべらほうもないよ宿
亭\トレ\其手紙先わしに見せさつせい ト良久敷考ひて能見れば彼十
一匁四分三厂書たるは土屋
四郎三郎といふ家から為
替に取組めとの文書なり宿亭\コリヤそふじやない土屋四郎三郎殿へ
為替にしろといふ事たわい トいわれてよう\氣
も付曇八取あへす
夜道

十一匁四分三厂

其外色あれとも略し先二本松滞留中は是きりと夫より歸宅迄の記行あるへけれ
と是は初めに其間の駅と初編にあらわしたれは福嶋より飯坂へ入湯の趣をしるす
福島の入口両
側茶屋女\サア\おいりなさいまア\ ト呼立る聲に引れ
てこし打かけ 曇

\よふ\今歸りました何ンとかみさんこ、ア仙臺と出羽から
江戸への往還たからよい男も折\はみなさるてあるふか私の
様な色男はめつたには有まいの茶女\とんた事をいひなさる何

おまへかよひ男なかきのふも私の裏のはきためを掃除したらお
まへの様な男かいくらもそろ\てうるさいからみんな一ツに
して川へ流して仕舞升たおまいも其所にいつ迄も居なさると川
へ流して仕舞升そ曇\そんならよもやわたし獨りを流す(挿絵)
氣てはあるまいおまい一所に流される氣かどうだ茶女\わたし
てはないおまいと一所に流す物かあり升わしのとこの死んだ婆
様か久敷腰ぬけて居ましたか其時つかつたおかはかあるからお
まいと其おかわと一所に流し升曇\倍は其おかわといふ女はよ
い女かとこのものたなんにしる女と聞てはなんてもかまわぬし
からは其おかはと我ら式人その川へうき名を流すのかこ、へ呼
なサイ\アイそんならおかわをお目に掛ましようコレおすい坊アノ
雪隠の角にあるおかわを持って来な トいひは彼小ちよくかけ出し持来る
を見るより皆と大笑となりければ

質の利の是程か、る事ならば

迎もおかわと浮名流さん

と興しつ、

夫より此所の拂をなし急きける程に漸忍山の麓に至る周\あん
まりたいくつたから案に得手をやるへいトヤン\うた思ひき
れとヲて小柄をヲなけいた小つか思ひいかきらりよかアへチャキ

くくべらほうめさすかと小つかとはぎちげいがつた小柄思ひ
といふかあるかいさすか思ひがきらりよかへさへッ、そうだつ
けへちとわしか鮮屋でもやるふ浄瑠璃可愛や金吾は深手の別れ
頼みも力もない中ちに巡り逢ふたか嬉しいか三位中将惟盛様か
此姿は何事ぞ袖のない此羽織に此おつむりはと取付てむせひ絶
入給ふにそ面目なさに惟盛も額に手をあて足をあてへおぎアか
れいくら面目かないとて額に足かあてらる、ものじやない

ト打 漸佐場野の醫王寺といふに至り弁慶の笈結信忠信の碑并
笑つ 遺物杯濟見し虎の尾の松南殿ナテの桜昼の星葉師堂皆と濟見し或茶
屋に休みへ姉さん何かうめへ物かあるかあるなら出してくん
な時にこ、ア佐場野といふといト武人呑なから

酌かわす忒人か酒の醫王寺や

これもとふたよ鯖さばの塩漬

(挿絵 長い野は聲引するやほと、きす

仙臺 日人)

曇へなんと面白かるふ時にモウ七ツたるふ是から飯坂迄ア明るく
と行かれよふか挑灯ちやうとうかいるまいか茶女へいかれ升ともそしてモウ
此ぢうはよつほと日も長ふなりましたト上そうりかけにて 茶女へ
片足外へ出し見て
また七ツにや日あしかよつほとありやす曇へそふかト取りあへす

御日あしは長くおあしはもう尽ぬ

前のおあしはち、みちようちん

曇へそんならモウちようちんかいるまいか茶女へハイまたいりま

せんよト爰をも打過漸飯坂に至る此所は咄しよりも賑はしく殊更此頃燒
て家並新しく普請したるにて聞しにま
さる花麗なる湯次場にて驚入斗なり所々の三味せん大鼓の音にそよめく
景色実に豊かなる御代とはいひなからあまりに有難さを思ひめぐらして

治れる御代の恵と飯坂や

前もつぶして肝もつぶして

斯打興し夕日の入るを會圖に赤川屋といふに泊ル

髭剃毛三編

天保八丁酉のとし

三月初いつか

これをいふ

形態

髭剃毛存二・三編 溜池泥亀著 天保八年三月写（自筆）

絵入 中二冊（仮綴）

本文共紙表紙（一八・五×一二・六糎）に直に「奥劔二本松
滞留滑稽之記／髭剃毛 二編／溜池泥亀著」と書さる。第三編
は同様に「奥劔二本松滞留
同飯坂道中滑稽之記／髭剃毛 三編／溜池泥亀著」
とあり。巻頭「髭剃毛二編奥劔二本松
滞留（飯坂）とあり
しを抹消）／溜池泥亀著」と題さる。第三編同様に「髭剃毛三
編奥劔二本松滞留
飯坂道中滑稽（飯坂滞留を道中と書直す）／溜池泥亀著」とあ
り。無辺無界五行、字面高さ約一六・二糎。ト書き部分を割書
として小字双行。他に擬音語・擬態語・語尾・韻尾等が小書き
され、科白にへを附し、発言者名が同様に小書きされている。
抹消・○印による挿入・切貼りによる訂正（三編二七ウ）・誤
字の上への重ねての書直し等が見られ、その形態から自筆稿本
と見られる。漢字にはまま振仮名がつけられている。尾題「髭
剃毛二編終」「髭剃毛三編」。本文共紙裏表紙に「天保八丁酉の
とし／三月上巳の日／これをいふ」第三編同様に「天保八丁酉
のとし／三月初いつか／これをいふ」と記さる。

本書は元斯道文庫長阿部隆一氏の蔵書で、「山鹿語類」と共

に本文庫のマイクロフィルムに収められている。私が斯道文庫
に入って間もない頃民俗学に関心があったので、それならこの
本を調べてみなさいと、当時阿部氏の郷里に近い安達（？）高
校の先生の許に貸出されていた本書を返却後に見せて頂いた。

題名からも分る通り十返舎一九の膝栗毛の亜流で、決して上乘
の作ではない。その上第二・第三編の遺存したものであり、全
体の構成を知ることができない。作者についても何らの手懸り
を持たない。こうしたくない尽しの事情から紹介を怠ってい
た。しかし近時地方の膝栗毛物が追々紹介され、特に昨年は尾
崎久弥氏以来地方文藝研究のメッカとも云える名古屋で、岸野
俊彦氏により「郷中知多栗毛」「股摺毛」等、尾張地域の膝栗
毛物が集成解題され、「『膝栗毛』文芸と尾張藩社会」として清
文堂から公刊された。こうした時資料の少い東北地方文藝の一
として、零本ではあるが紹介する価値はあろうかと本書を翻印
することとした。郷土史に関心をお持ちの方々によって詳しい
調査研究が為され、残餘の編が発見されるならばこれに過ぎる
幸はない。

本書入手の経緯は阿部氏からは聞かずじまいとなった。恐く
は郷里に近い福島の二本松や飯坂の道中記ということて入手さ

れたのであろう。本文の可笑しみは殆どが地口・口合で、落語の材となつてゐるものの焼直しが多く何ら新味はない。ただ前年（天保七？前後）の夏に流行したという五升踊（後生踊）や歌謡等の風俗、また本書のようなジャンルの中本（今云う滑稽本）をことばの本来の意味で「しやれ本」と呼んでいたこと等が窺われ、当時の音相や様相をそれなりに知る事ができる。

中で鬼瓦と鍾馗の話は今となつてはやや分かりにくかろう。

三村竹清氏の「続紹書話」（三村竹清集三収）に

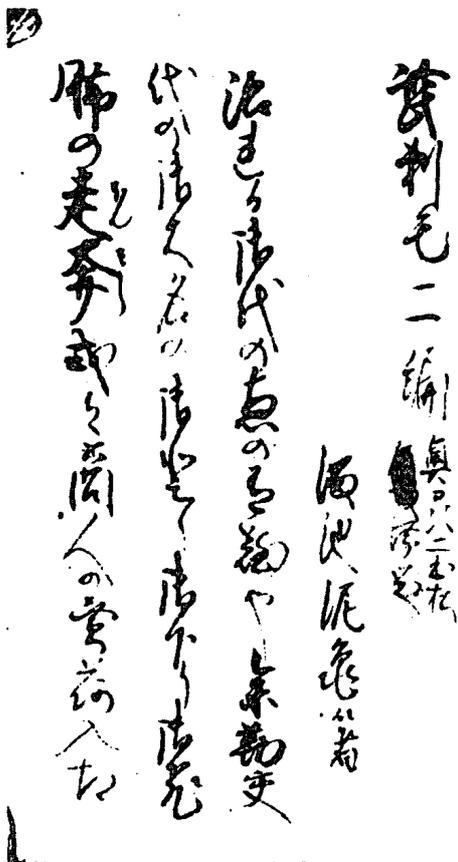
又内人の家の地所にて今の万世橋の北側西へよりたる河岸通に小松屋といふ船宿ありたり、条公など、毎々こゝにて遊ばれし由、此頃は船宿遊はやり、大かた今の待合茶屋の如かりしなり、林研海氏の詩稿を見しに、柳橋辺の船宿に宿しての作に屢見えたり、此小松屋の屋上に鬼瓦のいかめなるがありしに、其向の炭置場の屋根に小さき鍾馗の像ありたり、鬼に睨み伏せられぬ咒のよし、関西には多けれど、江戸には稀とおぼえぬ。

とあるのを引いておこう。

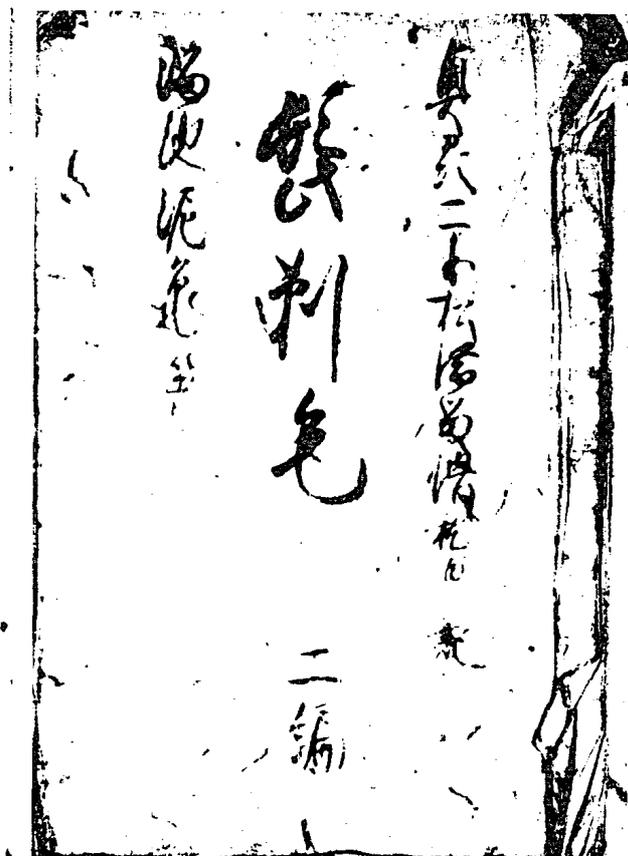
また行草体の手紙の文字の読違いは写本や整版本でこそ生きるレトリックで、金属活字の時代には適応しにくい。こうして

様々なレトリックが切捨られ、見せかけの効率化論理化が進んでゆく。

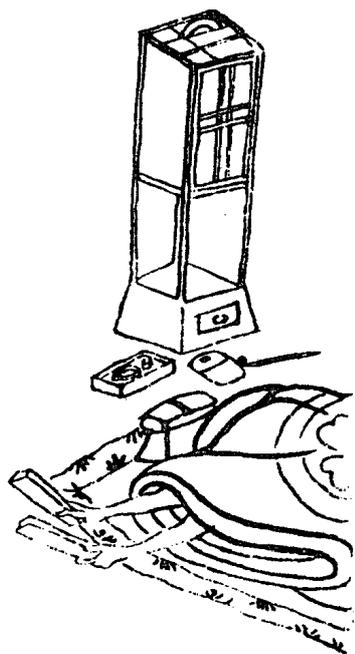
作者は溜池に栖む泥亀の意で、恐くは地方俳人かと思われる。なお主人公の一人周滑平という名告りは当時流行した「妙々奇談」の著者、飯能の薬種屋大河原氏、亀屋文左衛門、俗に亀文先生と云う人の替名と同じである。亀文先生、天保二年の没、妙に亀と結びつくけれども、今それ以上搜る手蔓を持たない。



第二編巻頭



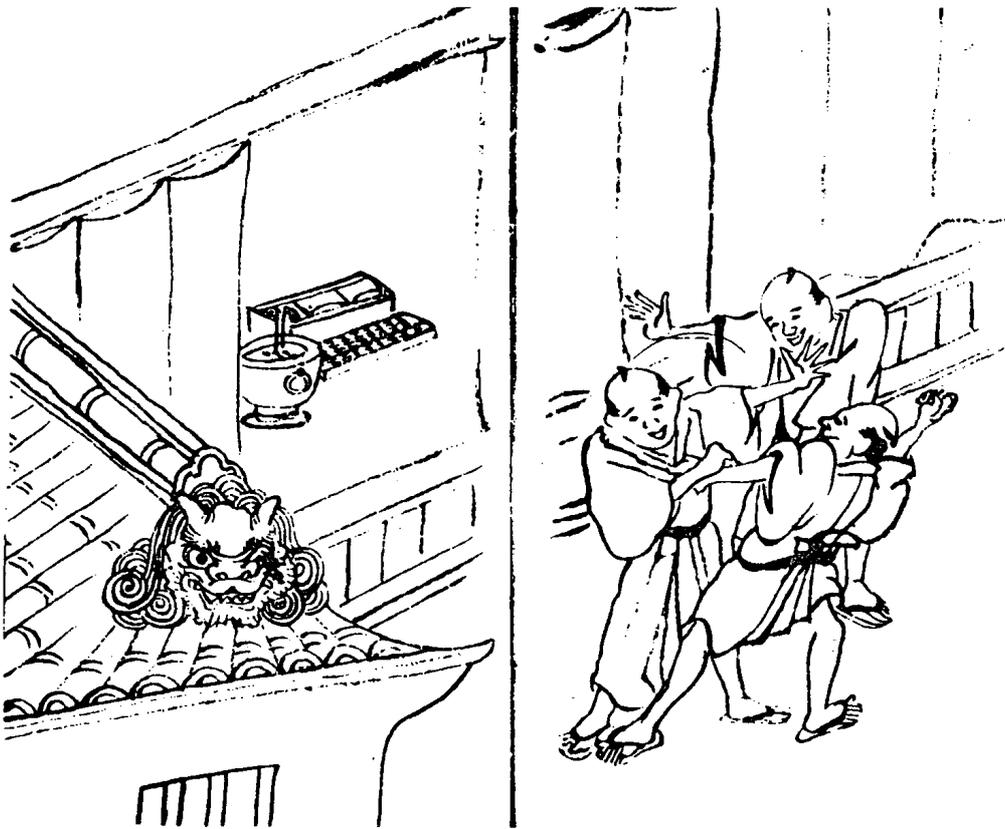
第二編表紙



第二編第17丁裏挿絵



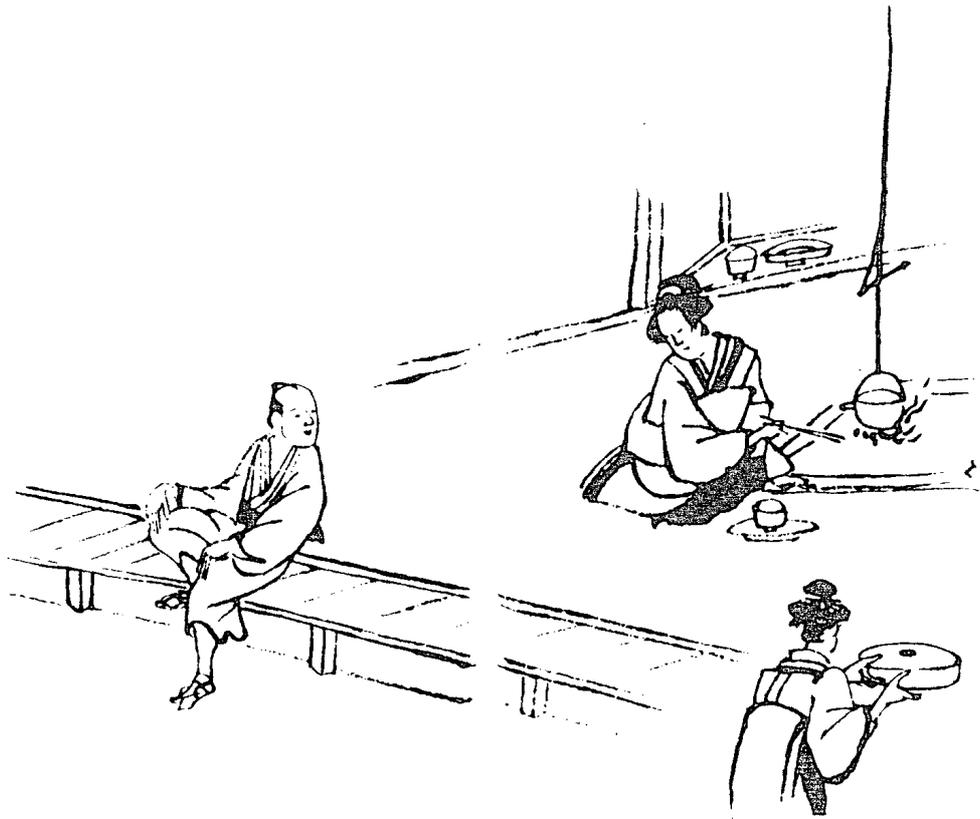
第二編第16丁表挿絵



第二編第16丁裏・17丁表見開挿絵



第三編第9丁裏・10丁表見開挿絵



第三編第25丁裏・26丁表見開挿絵



第三編第30丁裏・31丁表見開挿絵